

Title	書評：堀川三郎著『町並み保存運動の論理と帰結：小樽運河問題の社会的分析』東京大学出版会、2018年
Sub Title	
Author	小川, 伸彦(Ogawa, Nobuhiko)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2019
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.24 (2019. 7) ,p.191- 195
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0191">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20190706-0191</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

---

書評：

堀川三郎著『町並み保存運動の論理と帰結——小樽運河問題の社会学的分析』

東京大学出版会、2018 年

小川 伸彦

---

学ぶことばかり多く、文句のつけようのない書物をどう評すればよいのだろうか。本書は質量ともに圧巻の大著であり、後世がこれを名著と呼ぶであろうことはどうみても確実といえるハイレベルな一書である。

瑞々しい好奇心に満ち、知的刺激や切磋琢磨をいつも願っておられる堀川さんのことから、この書評の場でも、賛辞や紹介ではなく、火花の散るような論戦を望んでおられるはずだ。しかし疑義の呈しようがないのだから、ここはもう開き直るしかない。蛮勇をふるって、この全 7 章＋資料篇からなる約 500 頁の一冊を、まずはワンセンテンスで一気に、要約してみよう。

すなわち本書は、著者の 1984 年以来の約 35 年にわたる超長期調査の成果であり、導入部分で内外の先行研究（Diane Barthel の諸著作など日本では詳しく紹介されたことのないものをふくむ）の周到な検討と方法論・分析枠組みの提示によって自論のポジションを明確化するとともに（第 1 章）、日本やイギリスの町並み・景観保存運動の展開をレビューすることを通して「歴史的環境」が社会学の研究対象となりうることを闡明したうえで（第 2 章）、本書のフィールドである港湾商業都市・小樽へと読者を導き入れるべく「札幌を恨む都市」という印象的なキーワードを用いながらその明治以来の地政学的・経済史的位置を的確な時期区分にもとづいて把握・提示し（第 3 章）、その中で「運河」という存在がいかにして必要になり／やがて不要になり／行政によって全面的に破壊・再開発されようとし／そしてその矢先に市民からの保存のまなざしが注がれ／「運河戦争」とも形容される内部分裂をも伴う激しい運動過程を経ていかに一定の決着らしきものに至ったのについて、各種のドキュメントや丹念な聞き取りのみならずおよそ考えるあらゆる調査手法とデータと視座設定を用い、手に汗握るようなリアルな運動・交渉過程の描写と長大なライフヒストリー分析をも通じて、関与主体が依拠する「論理」を活写し、同時にあえて図式的な整理も行いつつ、行政の側がものごとを決める際のフレームワークはどのようなものであるか、保存を推進する側の論理がいかに多元的で一枚岩ではないか（ここで、耽美派・純粹保存派・まちづくり派・伝統的左翼運動派という見事なタイポロジーが登場する [215・310 頁他]）をあぶり出した上で（第 4・5 章）、第 6 章においてはそれらを「レイヤー」という概念を用いて多層的に突き合わせることによって行政と市民運動がなぜズレるのかを喝破し（322 頁）、さらに驚くべきことにここで論を終えず、保存されることになった運河がやがて観光資源化（1999 年には 900 万人以上の観光客入り込み数）し「出島化」（347 頁他）してしまうことでどのような変化が町にもたらされたのかについて、長期的視点とデータ

小川伸彦「書評：堀川三郎著『町並み保存運動の論理と帰結——小樽運河問題の社会学的分析』  
『三田社会学』第 24 号（2019 年 7 月）191-195 頁

をもつことによつてのみ可能となる独自の悉皆的パネル調査によつて解明し、そこからさらに論を進めて「過疎化」の概念を輻輳的に用いることで景観の公共性が失われつつある小樽の「現在」(378 頁)を浮き彫りにし、最終章においては都市の公共圏を「空間」としてではなく「場所」として生きる存在としての人間とはいったい何者かという深度にまで考察・思想を深めるべく、保存の本質を大胆に命題化した上で(後述)、研究全体の知見に照らして従来の都市社会学と環境社会学の示唆と限界を説得的に指摘し、以て本書を「歴史的環境保存の社会学」という新しい研究領域の扉に立つ一番最初のプロトタイプ(400 頁)と位置づけた稀有なる快著である。

それは、ありがちな既存論文の寄せ集め本とは全く異なっている。喩えに頼ることをお許しいただくなれば、この書物を読む体験とは即ち、小樽という町と社会学タウンを縦横に走行する堀川号に乗せてもらって上述の各場面を車窓からじっくり眺める体験にほかならない。堀川号のスペックは半端なく、ブルドーザーの迫力・ポルシェの機動性とタイムマシン機能をそなえており、この車の開発者である堀川氏は運転やガイド役も担う。そのガイド内容は徹底的で、窓から見える景色の過去と現在、出くわす人たちの人生や考えのみならず、この車がどのような車であるのかをも常にモニターして、その特徴や運転方法をも乗客に教えてくれるのだ。

これは、本書が方法論面でも学ぶことが多いということを意味する。先行研究をどのように目配りよくレビューすべきか、自分のフィールドを大きな文脈の中にどう位置づけるのか、行政文書の扱いかた、地域の定点観測のやり方、インタビュー記録のとり方と活かし方、対立する意見の当事者の双方を論じる技法、資料のウラのとり方、運動史の書き方、運動史の記述に社会学の命を吹き込む方法、ライフヒストリーの書き方、事例や語りから普遍性のある発見やタイポロジーに展開する方法などについて、学ぶことができるのである。

ではそもそも、この本書の主役である小樽運河とは何であろうか。きっとご存知ない方も多いと思う(評者もそうであった)。そこで本書に全面的に依拠しつつも、なるべく引き写しをせず、評者なりに咀嚼し語り直す感覚で以下、大きな構図をできるだけコンパクトに紹介させていただきたい(もし間違いがあれば小川の責任です)。

小樽運河の特徴は、地面を開削して造ったのではなく既存の陸地と埋め立て地の間にあり、湾に対して横向け(=湾と平行に)に位置するという点にある。全長は 1.3km で、開口部は湾につながっている。しかしそもそもこの運河はいったい何なのか。港の内側になぜわざわざ、どこにも行けない人工の袋小路の水路があるのか。それを理解するキーワードをひとつ挙げよと言われれば、おそらくそれは、はしけ(舢舨)である。

停泊中の船舶から効率よく荷を降ろしまた積み込むには、一連の流れが必要であり、陸の倉庫と船舶の間を媒介する鍵を握っていたのが舢舨の運用と荷を担ぐ港湾労働者の肩だった。では、1900 年ごろからの港の大きな発展とともに急増した舢舨を、どう走らせばよいのか。

そこで採用されたのが、「舢舨-運河荷役システム」(96 頁)であり、舢舨が往来する交通路の機能を担うものこそが運河であった。栈橋や埠頭に舢舨をつけるのではないこの方式の場合、運河

の兩岸に各社の倉庫をずらりと建てることで、ストックとフローのメリハリのきいた物流を実現できる。こうして、舩の運航と兩岸への停留が同時に可能な、40mの幅をもつ運河が1923（大正12）年に竣工。並び立つ倉庫群を背景に、舩がひっきりなしに行き交い、人々が忙しく立ち働く、活気に溢れた空間がここに誕生したのである。

しかし皮肉なことに、計画から完成まで20年もかかったこともあり、このあと小樽も運河もすぐに長い下り坂の時期を迎える。第一次大戦後には北海道産の農産物（豆類・雑穀類）の積出港としてヨーロッパの相場を左右する（93頁）とまで言われたこともある小樽港も、道内外の物流が変化する趨勢のなかで、運河竣工時にはその絶頂期を過ぎつつあったからだ。さらに時代が進んでも、戦時統制経済体制の影響や戦後の石炭需要の低下など、逆風ばかりであり、「斜陽のまち」という表現が用いられるようになる。そもそも舩を使うこと自体が、なんとすでに1923年の時点で、世界的には「変則」と専門家に指摘されていたとのこと（102頁）。埠頭の水深を確保し大型船舶を直接接岸させて、舩なしで荷の積み下ろしをして、鉄道やトラックで輸送する方式が世界の主流となっており、実際小樽にも、埠頭が建造されていった。

そんななか1960年代に構想されたのが新しい道路建設である。いまや「無用の長物」（121頁）となっていた運河を埋め立てて6車線の「道道臨港線」を整備し、港湾施設への運搬車両のスムーズなアクセスを確保しようというものである。これは、ある面から見れば、合理性のある施策であったといえよう。というのも、旧来型の交通路（運河）を現代的な交通路（道路）に転換しようとする判断だったからである。

実際、市民はこの動きに総じて「無関心」（108頁）であったという。市が道とともに、国の補助金をえて、市のためにおそらく良かれと考えてすすめることに特に口出しする必要はないからだ。しかし、南北に伸びる運河の南端にある倉庫群が取り壊され始めた時、動きが起きる（109頁）。なにか変だぞと感じた住民たちが現れたのだ。それが、保存運動の始まりだった……。

この先はぜひ本書をお読みいただきたい。というよりお読みになりたくなかったのではなかろうか。そう堀川氏は稀代のストーリーテラーなのである。堅い研究書には珍しく、次のページ、次の展開が待ち遠しいという思いを読者に与えてくれる書き手だ。

そして着地点はどうか。大著にありがちな、総花的でいろいろ調べました的結末では全くなく、本書の結論は極めてクリア。「保存とは変化することである」（第7章）というのがそれである。評者は、これまで比較的長い年月、社会学の枠組みで「（文化財）保存」の問題を考えてきた者であるが、「保存とは変化」と言われても、お恥ずかしながら最初はさっぱり理解できなかった。保存とは変えないこと、のはずだからだ。この逆説を理解するためのキーフレーズを堀川氏は用意してくれている。保存とは「変化の社会的コントロール」（310・387頁ほか）のことであるというのがそれだ。一読、唸らずにはいられなかった。違うのでは、と反論したいのだが、原理的に考えれば考えるほど、なるほどそうである。

評者なりに整理しておこう。すべての存在は日々変化する。とすれば、何かを保存することは、不可避免的に起こるその変化を制御することにほかならない。要するに、「保存」とは人為的

行為であり、これに対置されるべきもう一つの人為は「放置」であるはずだ。つまり、「保存」が戦う相手があるとすれば、それは、「変化」ではなく「放置」であろう。別の表現をするなら、放置等によってもたらされる変化をコントロールすることこそ、保存なのである。

屁理屈をこねるならば、変化のコントロールの中にも、変化を許容するようなコントロールと変化を許容しないコントロールの二種があり、前者を広義の保存、後者を狭義の保存と呼べるような気がする。しかし氏の論に依りつつよく考えれば、後者の、変化を許容しないほうも、対象のありのままを尊重するかに見えて実は非常に不自然なことである。変化させないためには、あらゆる配慮・ケアや修理・保全といった人為的働きかけが必要であり、そこには取りも直さず、対象に強力に介入し、変化をコントロールする意思が作動しているはずだ。つまり、凍結的といわれる保存でさえ、変化をコントロールしているのである。とすればやはり、広義であれ狭義であれ、堀川さんのおっしゃるとおり、保存とは変化をコントロールする社会的な営みにほかならない。

これを敷衍して、最後にふたつの点にふれておきたい。ひとつは、いわゆる開発も保存も、上記の観点からすればともに変化を社会的にコントロールする営みであるのに、なぜ両者は対立の構図で語られ、当事者同士（行政と市民など）もつい対決モードになったりしてしまうのか、という点だ。

もちろん、解体したい行政側と残したい市民側が、「実はおたくもうちも変化のコントロールをしたいんですよ」とばかりに、すぐに手をとりあうことは難しいだろう。そこには公共圏観のズレ（＝運河を空間とみるか場所とみるか [382 頁]）といった抜き難い溝もあろう。しかし、本書が発しているのは、実はどちらの当事者も人為的なこと（＝変化の制御）を目指しているのですよというオトナの教えとも読める。ナイーブな感想かもしれないが、＜私たちは結局、一見自然派に見えていても実は、開発であれ保存であれ人為的なことをしたいのだ＞という意識を深いところで共有することができれば、何らかの知恵に達することができるのかもしれないし、保存側の中に発生しうる不幸な内部対立を少しは回避できるのかもしれない。

もうひとつは、「変化」そのものについてである。

本書の方法論の面で、心底おどろいた調査が二つあった。一つ目は町並みの変化の経年調査である。これは、運河港湾地区の建物約 280 軒と商店街の 116 店舗のなんと約 20 年間にわたるパネル調査（1997～2016 年のほぼ毎年）であり、それぞれの家や店や倉庫がどう変化したのかを実際に訪問してつぶさに記録し続けたもの（333-352 頁）である。二つ目は、土地の所有関係調べ。観光化が顕著なエリアを選定し、計 22 筆の土地について明治期から 2000 年代までの登記簿情報等を調べつくし、所有者や所有権移転の時期を確認したもの（352-363 頁）である。

前者の調査からは、外観は改装されていても住民には変化と認知されていないケースもあることや、用途面では地区の観光化（土産物店や飲食店への転換）が顕著でありながら、小樽の景観を象徴するはずの倉庫が実は減少しているといった発見が報告されている。また後者の調査からは、驚くべきことに、＜小樽にも最近では「内地」など外部からの資本が入ってきて、困

ったものだ>といった言説が神話＝聖なる物語（357頁）だったことが確認された。ここから、なぜ一部の地元資本が外部資本視されるのかという新たなテーマが析出され、仮説的考察も展開されている。

評者がこれら二つの調査に驚いた理由は以下のとおりである。

まず、保存は変化だという概念的な発見に安住せず、なにがどう変化したのかを、丹念に調べ尽くそうという実証精神に対してである。調査地の登記簿を調べ尽くすという発想は、堀川氏には当然のことなのかもしれないが、小生にはそこまでやるかという驚嘆しかなかった。

そしてもう一つは、主観面への着目。建物と店舗の経年パネル調査は、物理的実態だけでなく、住民が何をもって変化と受け止めているかという主観的位相をも確認することで、建築学的調査を凌駕する成果をあげている。

とすればここにあるのは、ひとつの新しい社会学の誕生ではないのか。それは、変化の社会学、とでも命名できるものである。保存は変化である、というのが本書の中核テーゼであるならば、＜歴史的環境保存の社会学＞の幕開けを宣する本書が、同時に＜変化の社会学＞のマニフェストであっても何の不思議もない。そして町並みや環境の客観・主観にわたる変化を検証する視座と方法は、すでに本書で明確に提示されているのだ。

（おがわ のぶひこ 奈良女子大学）